



鈴木鎮一先生 思い出の写真

鈴木先生を囲む生徒たち、そして奥の母親たちも、くっつくのない笑顔ばかり。決して裕福な時代ではありませんでしたが、心の贅沢ぜいたくがありました（1960年頃の松本音楽院）



鈴木先生の笑顔

2008年の鈴木先生没後10周年&生誕110年の記念イヤーを機にスタートした「鈴木先生の思い出の写真」30回を数えた連載の最終回となる今7回は、誰の心にも大きな思い出として刻まれた「鈴木先生の笑顔」を取り上げることになりました。

鈴木先生のいらっしゃるころ、そこはいつも温かな笑顔に包まれていました。洞察力と直感に優れた鈴木先生は、笑顔がもたらすチカラを強く感じておられました。1957年発行の機関紙に、「ほほえみは幸福をよぶ」と題された文章が残されています。

「ほほえみは家庭の幸福をつくり、人の好意を築きあげ、また友情を探める働きをする。ほほえみを浮かべるには、資本はいらない。しかし、どんな裕福な人でも、ほほえみを浮かべずに暮せるといふいける人はいない。また、ほほえみを浮かべたおかげで裕福になれなかったという人もいない。ほほえみは金銭では買えないし、借りることもできない。また盗むこともできない。ほほえむ時間はほんの瞬間であるが、計ることのできない素晴らしい価値がある。ほほえみを忘れた人に対しては、ほほえみを浮かべて接すること。ほほえみはそれを必要とする人を元気づけ、愉快な気分にする。いつもほほえみをたたえながら人生を明るく豊かにしよう」

鈴木先生は「笑顔」や「ほほえみ」が、人と人との間の潤滑油になり、互いの成長を促すことを、才能教育運動の中から体得てんぱくされていたのです。それは、海外からの留学生にも伝播でんぱし、スズキ・メソッドが世界に広がる原動力にもなりました。

一方で、生まれた子どもにも母乳を与える母親の愛情に溢れた笑顔が、乳児の頭脳活動を活性化させることにも、言及されました。「子は親の鏡」とは、まさに言い得て妙です。今の時代だからこそ、毎日の中に、「笑顔」や「ほほえみ」を大切にしたいものです。